

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401/044-988-0004

<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>

第176号



新年、あけましておめでとうございます

本年もよろしくお願い申し上げます

柿生郷土史料館 館長

柿生中学校 校長 石井 秀明

今年は干支でいえば、「癸卯」（みずのとう）です。「春の間近でつぼみが花開く直前」という意味と「冬の門が開き、飛び出る」から「これまでの努力が花を開き、実り始める」と言われています。

さて、新型コロナウイルス感染症が国内で初めて確認されてから3年が経とうとしています。社会構造や雇用環境が急速に変化して今後の予測困難な時代となっています。柿生中学校でもコロナ禍においてどんな取り組みができるか試行錯誤しながらの学校生活でした。

そこで、温故知新というとおり、100年前にあった出来事を調べてみると、「麻生の禅寺丸柿の生産量が225トンと急減する」、「柿生で最初に早野に電気が引かれる」、「柿生郵便局が電報配達を始める」と記載されていました。その中でも、大きなできごとは関東大震災です。今も昔も自然災害に備えなければいけないということですね。

柿生郷土史料館にとっては、本年が開館13年目にあたります。令和4年10月には柿生文化カルチャーセミナーが再開されました。今年も地域の皆様と共に、歴史と文化を学びながら、着々と歩んでまいりたいと存じます。

本年も、皆様のご活躍をお祈りするとともに、素晴らしい年となりますよう、お祈り申し上げます。

(参考 麻生郷土歴史年表 小島一也)



本物に触れる貴重な体験

柿生中学校 校長 石井 秀明

柿生は柿の故郷だと地域の方から話を伺いました。少し前の事ですが、柿についての話題です。宮前区有馬の家内の実家には柿の木があり、収穫したスーパーの袋いっぱい柿をいただきました。我が家の夕食後のデザートになっています。毎日柿を食べていますと、息子たちの手が柿へ伸びなくなっています。

さて、休日の私の楽しみは里山を歩くことです。地図を見て、寺社仏閣が固まっている場所をさがします。その場所を勝手に”神様エリア”と命名して、どんなところなのか実際に散策してきます。その場所には、清水が湧いていたり、見晴らしがよく丹沢山地が見渡せるところだったり、大昔は古墳だったところや断層が近くにあるところもあります。すべてに共通しているのは、ずっと昔から人の営みがあって、今に受け継がれてきているのだろうと推測することができることです。 (以下4ページへ続く)

シリーズ

麻生区の地名 その1

麻生の地名と麻生郷

菊地恒雄(日本地名研究所 研究員)

麻生区を中心に、地名について連載を依頼されました。今までも多くの方が、地名と関連付けたお話をされていますが、地名にはいろいろな解釈があり、答えは一つではありません。そのことをふまえて、いろいろな角度から考えてみたいと思います。

麻生区の区の名前になった、麻生についてまず考えてみましょう。アサオ・アソウなどと読みます。アサは大きく分けて、アサ科の大麻と、クワ科の苧麻(カラムシ)があります。両方とも古代から栽培されましたが、大麻の方は目が粗く、籠や敷物などに加工されました。一万、目の細かい苧麻は繊維として布に仕立てられ、調(貢物)として奈良の都に納めたという記録があります。



天正18年(1590)頃の麻生郷の範囲

苧麻の産地は全国にありましたが、その中でも武蔵国は朝廷から指定されて生産されています。余った布は商布(たに)として、市場に出すことも許されていたほどです。

私は麻生区一帯が苧麻の産地であったと考えました。その根拠が夏刈(ナツカリ)という地名です。

『柿生文化』160号に修廣寺住職の菅原節生様が「夏蒐(なつかり)共同塾」について書かれています。また、ナツカリの由来について、源頼朝がこの地に来て狩りをしたことによるという伝承を伝えています。

片平の夏刈山の他に、王禅寺に夏刈谷戸という地名が伝えられています。では、ナツカリとは何かということです。これは、焼畑の一種として、ハルカリ、ナツカリ、アキカリがあります。ハルカリやアキカリは畑の雑草などを刈り取り、乾燥させて焼き払い、肥料にしたものです。一方、ナツカリは植物の成長を統一する目的で行われたのです。

苧麻は春になると一斉に成長しますが、そのままにすると、高さが不揃いで規格にあった製品にすることができません。そこで初夏の6月に一旦根元から苧麻の若芽を切る作業がナツカリなのです。そして同じ高さに成長した苧麻を8月に切り取り、その茎から表皮を剥いで晒して繊維にしました。

今でも、福島県の産地では同じ方法で生育して、質の良い繊維を新潟県の加工場に送って「越後上布」にしています。

麻生は苧麻の字を変換し、麻苧(アサオ)とし、麻生となったとも考えられます。また、麻績(オミ)と麻(ヲ)を積(ウ)むともいい、麻をヲと呼ぶ場合もあります。

麻生郷の名は元弘3年(1333)の足利尊氏の『所領目録』に出てくるのが初見ですが、それより前は、金沢の北条時顕の領地であり、それ以前に麻生郷が存在していたことが考えられます。麻生郷の一部を鎌倉にある足利尊氏の祈禱寺である保寧寺に寄進しています。

永禄2年(1559)の『小田原衆所領役帳』に小机麻生郷と王禅寺領麻生内とあり、小机城の管轄に属していたと思われます。その後、天正18年(1590)の豊臣秀吉が小田原攻めに際し、郷村への乱暴狼藉などを禁ずる制札に麻生郷内の9ヶ所の名が記されています。

「王禅寺村・古沢村・万福寺村・片平之郷・黒金之郷・石川之郷・三輪之郷・荏田之郷・大柵之郷」とあり、現在の麻生区の大半と横浜市、町田市の一部にまで及んでいたことが分かります。

近世初頭の郷村制再編により、麻生郷はいくつかの村に分離され、王禅寺村から上麻生村・下麻生村・王禅寺村・早野村が成立したものとされます。

シリーズ

教育の歩み 番外編

ゆとりの教育をめぐる(2)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

「ゆとりの教育」は、時代のニーズに合わなくなった「詰め込み教育」のアンチテーゼとして登場した、新しい教育構想でした。当時の文部省で「ゆとりの教育」の旗振り役を務めた寺脇研氏は、次のように語っています。「ゆとりの教育は、長い時間と多くの方々の知恵と経験を結集して検討した結果、導き出された教育政策でした。すなわち、生涯にわたって学習する、その一環が学校教育であるという考え方に立った教育改革が必要であること、そのために知識重視型ではなくて経験重視型の教育改革と方針のもとで生きる力をはぐくみ、ゆとりある学校づくりを目指すことにしたのです。…中略…経過を簡単に説明すると、…中曽根内閣の時代、1984年に当時のそうそうたる知識人をお迎えして、3年間議論しました。その結論がこうだったわけです。…中略…大切なのは、ゆとりの教育の最大の背景が、『時代が変わる』という認識にあったことです。…中略…20世紀の終わり近くまで世界を支配してきた近代というものが、終わりを迎つつある。世界は近代においてずっと続いてきた成長の限界を迎えているのだから、そのことを見据えた未来、脱近代を構想できる人材を育てることに狙いがあったのです。…」(出口汪・寺脇研『ゆとりの教育の真実』)

「ゆとりの教育」の構想段階では、時間をかけて丁寧に議論を進めた様子がよくわかります。しかし、実際に「ゆとりの教育」の導入段階に入ると、もたつきが目立ちます。学校五日制の導入が絡んできたからです。国際的に働きすぎを批判されるようになった日本の企業社会にも、週休2日制の導入が普及する中で、公務員である国公立の教員にも週休2日、週5日勤務を適用するには、「ゆとりの教育」に舵を切って「詰め込み教育」を是正する機会を捉え、週当たり授業時数を削減して半ドンの土曜日も休日とする「学校五日制」とするのが望ましいという方針が加わったのです。

前号に教育課程の改訂と学習指導要領の改定は、ほぼ10年周期で続けられることを記しましたが、ゆとりの教育の導入と学校五日制の導入については、1992年(平成4年)の改定と2002年(平成14年)の改定の2段階で行われました。時間をかけて段階的に学びの量を減じようと配慮したように見えました。しかし、「ゆとりの教育」の実践は、92年の改定から始まっているのです。まず92年9月から公立学校には月1回の土曜休日が義務付けられ、毎月第2土曜日が休日と定められたのです。3年後の95年(平成7年)には、第2に加え第4土曜日も休日とする隔週学校五日制が義務付けられ、2002年(平成14年)からは、土曜全休の完全学校五日制が導入されたのです。

ここに大きな間違いがありました。引用した寺脇氏の言にあるように、「ゆとりの教育」を導入した狙いは、時代が大きく変わることを踏まえて、知識重視の詰め込み教育から考える力を涵養する思索重視型教育に転換するという、壮大な教育改革にあったのです。稀有な壮大な計画であっただけに、行く手の困難も想像できたはずですが、なぜなら、言葉にするとそう難しいことには見えませんが、児童・生徒を教育する先生たち自身、詰め込み型教育の申し子であり、教員試験を受験したライバルたちとの受験戦争に勝つことで、教育現場に立つことを許された人たちなのです。子どもたちの父母や祖父母もまた詰め込み教育しか知らない人たちです。当然「ゆとりの教育」の何たるかは、丁寧に噛んで含めるように説明を繰り返すことで理解を深めてもらう必要があったのです。残念ながらその努力は極めて不十分でした。そこに、学校五日制が飛び込んできたのです。マスコミも中途半端な理解のままに、「ゆとりの教育とは土曜日分の授業を減らし、その分教科書を薄くすることだ。これでは子どもたちの学力低下が心配だ。」とゆとり教育反対のキャンペーンを張ったのです。保護者の多くはこのキャンペーンに賛同し、子どもたちの学力低下に不安の声を上げたのです。

一つのデータを紹介します。東京23特別区内に32の公立中学校がある区のデータです。この区の中学校の3年1、2学期(当時は3学期制でした)の学校別合計授業数と、3年生の国・社・数・理・英5教科合計の平均得点を調べたデータです。学校別の合計授業時数にはかなりのバラツキがあるのですが、授業時数が767時間と最も多かった学校の学力順位は、平均259.8点で、全体の17位。授業時数2位の764時間の学校は278.1点で32校中9位。758時間で全体3位の学校は264.1点で14位です。学力順位1位と2位の学校は、授業時数が共に702時間で27位に並んだ学校で、301.4点と293.5点でした。要するに授業時数を増やせば学力が上がり、授業時数を減らせば学力が下がるといった相関関係は見られなかったのです。「ゆとりの教育」と「学力低下」を結びつける思考は単純で分かりやすいために、マスコミがしっかりした検証もせず報道し、世論を巻き込むことに成功して一大キャンペーンになりましたが、問題の本質を曖昧にして学力問題を抜本的に解決することを遅らせることになり、必要な教育改革を遅らせる残念な結果に繋がってしまったのです。(続く)

(1 ページから続く) 最近の気に入った場所は、横浜市と川崎市の境界にある宗英寺から戒翁寺近辺の里山です。途中には鶏舎や遺跡の発掘現場もありました。たぶん昔から変わらない景色がここにあると感じるだけでなく、人の手入れがしっかり行われていることで保たれているに違いないと思ひながら歩いています。



琴平神社本殿

昨年10月22日(土)には柿生中学校の文化祭がありました。生徒の展示見学の時間に柿生郷土史料館を開館していただきました。数多くの保護者や中学生が見学を訪れて、じっくりと史料館内を見ていきました。見学した生徒に感想を聞いてみました。

◎貴重な展示品(解体新書、土器、五人組の帳簿、石器など)沢山あり興味深かった。特に福沢諭吉の学問のすすめの初稿は、何が書いてあるかはわからなかったけど、教科書で見たものが実際にあったものなんだと実感できた。(3年 斉藤さん)

◎想像していたよりもたくさんの歴史的な物が置かれていて、柿生の歴史は奥深さを感じました。中には、社会の授業で出てきた地券なども展示されていて、実際に自分の目で見られるという、とても貴重な体験になりました。(3年 中村さん)

◎郷土史料館には、社会の授業で出てくるものがあると聞いていました。私は、日本刀目当てで中に入りましたが、他に地券や火縄銃など興味を引くものがたくさんありました。社会で学んだ知識を参考に、見て回るとおもしろいと思いました。学校とは別の場所に来た感覚になりました。(3年 鳥居さん)

◎どんなものが中にあるか全く知らなかったのので、入って展示しているものを見て、驚きました。お話を伺うと、配られた銃だったけど使わなくなって、寄贈されたものだとおっしゃっていました。社会で習った歴史では地方でどのような生活を送っているかまではわからなかったのので、とても勉強になりました。昔の「本物」の本にもふれることができ貴重な経験になったなと思います。(3年 星野さん)



禅寺丸柿原木

史料館の方々は、毎朝地元の小学校のそばの道路に立って、交通整理をしているとお話を聞き、地元の子供のためにも活動していることを知りました。本当にありがとうございます。

そこでのあいさつからちょっとした会話につながれば、互いに知り合うことができるのではと感じています。今後、史料館に関わる地域ボランティアの方々を生徒に紹介して、世代を超えたつながりをさらに広げることができればと考えます。

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日：奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

1月 8・15・22・29日 (毎日曜日)

2月 11・18・25日 (毎土曜日)

◎開館時間：午前10時～午後3時 (緊急事態宣言、蔓延防止等重点措置宣言下では休館です)

第20回 特別企画展

ポスターで迎える昭和の映画

期間：10月8日(土)～1月22日(日)

場所：柿生郷土史料館特別展示室

戦後の日本映画黄金期の娯楽映画のポスター14枚を展示いたします。映画の製作者は、東宝、松竹、東映、日活、大映の5社からなり、昭和29年旗本退屈男/謎の怪人屋敷(市川右太衛門)～昭和41年スチャラカ社員(長門勇)までと、まさに戦後の日本映画全盛期の姿を映しています。なつかしさも満載です。

右のポスターは昭和35年7月公開の「霧笛が俺を呼んでいる」。日活が大々的に売り出した赤木圭一郎のヒット作で、日活得意の無国籍なアクションドラマが展開します。親友の恋人の妹役で、当時新人だった吉永小百合も出演しています。

